

## イギリス的研究生活のスヌメ

英国国立医学研究所神経生理学部門 榎木 亮介

博士取得後の研究留学が盛んな昨今、生命科学分野の留学先といえば圧倒的にアメリカが大多数であり、イギリスに研究留学しようとした場合、書物やWebSiteが意外に少なく情報集めに苦戦する。昨年、殆ど情報を得ないままイギリスにやって来てから、日本と研究事情の違いやお国柄の違いに色々と驚き、少なからず戸惑った。おそらくアメリカとも、そして日本とも違う、イギリスの研究生生活について私の体験を書きたいと思う。

私が所属する英国国立医学研究所はロンドン北部の郊外の丘の上に位置する、英国 Medical Research Council (MRC) 最大の研究所である。約100年の歴史があり、古くはヒトウイルスエンザウイルスの発見、神経伝達物質アセチルコリンの発見などで数多くのノーベル賞科学者を輩出している。研究所の建物は50年の歴史がありその古く威厳のある建物は、来年公開のバットマンの映画に登場するようである(写真参照)。研究所の裏手には見渡す限りの農場が広がり、羊や馬が放牧され、イギリスの田舎的風景が広がっている。イギリスらしく3、4面はフルコートで取れるような巨大な天然芝サッカーコートやテニスコートなどがあり、昼休みなどには研究員たちが思い思いに体を動かしている。私は神経生理学部門の Drs. Tim Bliss, Alan Fine のもと、共焦点レーザーや二光子顕微鏡などのイメージング技術を用いて、シナプス伝達や可塑的变化に伴う海馬神経細胞の樹状突起スパインや微小樹状突起のカルシウム応答を解析している。また様々な遺伝子導入技術を用いての重要タンパク質可視化解析も試みている。

グループリーダーの Tim Bliss はシナプス伝達の長期増強 (LTP) の発見者としてあまりに著名であり、彼が LTP を発見してから30年以上が経った今も、LTP はいまだ脳研究の中心課題となり続けている。彼は今年で64歳になるが、20、30代の沢山の若いポストドク達に囲まれ今も精力

的に研究をしている。彼を訪ねてやってくる研究者は多く、居ながらにして著名な神経科学者達の講演を聞くことができる。

私はこの研究所には昨年6月にやってきてまず驚いたことは、みな時間的にとてもノンビリしている(ように見える)ことだ。こちらの研究ベースは日本でもそれほど Hard Working ではなかった私でも最初はかなり戸惑った。朝10時過ぎにぼちぼちと出勤しだし、昼休みは一時間かけてたっぷり食事をとる。多くの人は一週間に何回かは午後にスポーツを楽しみ、3時ごろにはカフェテリアには多くの人々が「午後の紅茶」を求めて集まってくる。普段は5、6時ごろには帰宅し、週末には研究所内のバブで早々と仕事を切り上げた人たちがビール片手に仲間と語らう。そして、土日は必ず休みを取る。年に通算40日間の有給休暇があり、皆長期で休みをとって旅行や自国へ帰省したりする。日本時間にならされた私からすると、ここではみな羨ましいくらいの優雅な生活を送っている。留学先で一日も早く成果をあげたいと意気込んでいた私は少なからず肩透かしを食らったおもいであった。

これで一体いつ仕事をしているのかと疑いたくなるが、しっかりと毎年一流紙に論文が何本も出ている。Tim の1993年の Nature の Review は引用回数3800回を越し90年代の神経科学分野最多引用回数論文であるし、Tim も Alan も Nature, Neuron 級の論文をここ数年幾つも発表している。何か秘訣があるのだろうと考えてみれば、その理由は幾つもあるが特にここで感じることは、研究そのものを「楽しもう」とする思考がとても強い、ということだ。まだこちらに来て間もないころ、ボスと最初に実験テーマを話し合っているときのこと、「一番重要なのは君が楽しいと思う研究をすることだ」と何度も言われた。「君が興味をなくしたら研究テーマを変えよう」とも言われた。今までももちろん一番興味の持て「楽しい」と思

える研究をしてきたつもりだったが、この研究室ではそれが何より優先順位が上であるように思う。そしてなにより、先のイギリスの時間の「余裕」がいい研究を生み出しているのかもしれない。ある時、研究で行き詰まり悩む私をみてボスは「Holidayをとって遊んでください、Enjoy your life!」と声をかけてきた。このボスの言葉は私にはカルチャーショックであった。

このイギリス的余裕は時に極めて効率が悪くイイカゲンで、迅速正確の日本からやってきた私からするとイライラすることも多々ある。発注した試薬などがいっこうに届かず、すぐ電話しますと言ったまま連絡が途絶え、一日で済むような事柄に何日も何週間も費やし…とこれが世界の先進国だろうか？と疑いたくなるような出来事を数え切れないほど体験し、これだけでエッセイが何本も書けそうなのだが、ここはイギリス、紅茶でも飲みながらイギリス的研究生活にどっぷり漬かっ



次回作バットマンで使用される予定の研究所の建物。夜になるとそれらしい？雰囲気がある。

て、研究を大いに楽しもうではないか！と思っている。今年の夏にはボスの Alan の研究拠点移動に伴い、カナダのハリファックスに移る予定である。今度はまたイギリスとは違った、カナダ的研究生活を体験できることを楽しみにしている。